

+

2021 年

11月第1・2週の主日礼拝説教要約

・ 11月 7日：マルコ福音書10：17-27.

「 神の国に入る者 」

・ 11月14日：マタイ福音書20：1-16.

「 天の国の労働者 」

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

「金持ちが神の国に入るよりは、駱駝が針の穴を通るほうが易しい」、とのイエスの言葉に驚いた弟子たちは、神の国の救いというものが理解不能に陥ります。

この直前にイエスの許をおとずれていた金持ちの人物が、イエスに対して、「永遠の命を受け継ぐためには何をしたら良いのか？」と、質問したのが、そもそものはじまりでした。モーセが授かった神からの戒めは全て遵守してきたというこの人物に、「まだ欠けているもの」があることをイエスは指摘します。自分の財産を売却して、貧しい人々に分け与えよと。するとその人物は顔をくもらせて、そのまま立ち去っていたのでした。

神の国の救いはさておき、もしこの人物がイエスと弟子たちのために財産の一部でも寄進してくれたなら……と、淡い期待を寄せていた弟子たちにとって、イエスと金持ちの会話は期待はずれでした。

「永遠の命を受け継ぐために、どうしたら良いのか？」という問は紀元1世紀頃に、ユダヤ人の若者を中心に、教職者に対してよく、投げ掛けられた質問でした。そのためにマタイ福音書では、金持ちが若者であったことになっています。これとは別の日に、ある律法の専門家が、「善きサマリア人」の譬え話を聴く前に、イエスにしたのも全く同じ質問でした。

金持ちの人物と律法の専門家、このどちらもイエスの後に従う道は選びません。彼らは、「永遠の命」を求めつつ、なおも自分が自分なりに自分のために生きてゆく道を模索していたのです。神と人を愛し、神と人のために生きるのではなく。社会福祉も隣人愛も、彼らの心の中では絵に描いた餅のままです。その精神に言及することさえありません。

永遠の命と神の国、この二つは当時のユダヤ人にとっては切っても切れない神の救いのキーワードであり、彼らの祈りの中にも常にありました。ただ、どうしたらそれを見出させるのか、どうしたら、そこに辿り着けるのかは誰にも分からないことでした。けれども、ナザレのイエスに付き添う人々は違いました。彼の口から溢れ出ずる言葉の中に、またその行いの中から多くのヒントを得て、その命とその国の存在をを直に垣間見ることができたのです。これを宣べ伝えるべきもの、語り継ぐべきものとして。

天の国は、夜明けとともに出て行って自分の葡萄畑のために労働者を雇う、ある家の主人に似ている、聖書にはそう記されています。「天の国」がなぜか「主人」に似ていると。これは一体、どういうことでしょうか・・？時々、イエスの話に激しく反論する人がいます。彼らはきまってこう言います、「主よ、そんなことが、あり得ますか？」と。わたしも、そう言いたいところです。アメリカ合衆国がトランプに似ているのか、それともバイデンに似ているのかと問われても、返事の仕様の無いのと同じです。

神学的機転をきかせると、主人に似ている国とは、すなわち、その国の仕組みそのものが、主人の信念、主人の流儀によって成り立っている、ということになりそうです。すると、そこが天の国であるかぎり、その主人は神以外にはないことに気がつきます。すると、おかしい問題に出会します。天の国にも失業者がいるのか？と。また、天の国でも額に汗して働くのかと。真実に近付くためには試行錯誤を重ねることになります。そうです、天の国とは別名神の国とも言われ、そこが天上か地上かにかかわらず神のテリトリーであることを意味しています。イエスによると、「神の国は、(地上の)あなたがたの中にある (ルカ福音書17:21他)」のも事実なのです。

さて、中東の葡萄畑は、収穫の時期になると猫の手も借りたくなるほどの忙月となります。広場で屯する失業者には、日に何度も声がかかります。ここまでは聖書の情景と同じです。ところが、早朝からの労働と日没前からの短時間の労働、このどちらにも1デナリオンという「高賃金」が、それぞれ契約発生時に約束されていたのです。国会議員の通信費がその月の最後の1日分だけでも、1月分の100万円が支払われるのによく似ています。こちらは全ての当選議員が、平等に丸儲けとなりますが、俗世間では大問題となる案件です。一方、聖書のお話は始めから平等ではありません。労働時間の長短に拘わらず、賃金は同じなのです。

天の国の主人とは、神ご自身です。早朝から日没までこの主人に仕えた者と、日没前から同じ主人に仕えた者にそれぞれ全く同じ報酬を賜るのは人ではなく神です。親が長子にも次子にも全く同じ愛情を注ぐのと同じです。その親の愛と創造主の愛はよく似ています。ただ、創造主の愛

すなわち神の愛は、被造物全てに注がれる愛です。これがもし天にも地にも注がれるのならば……、この愛に反感を抱くことの間違いを、イエスは譬えの中で語っています。

けれども、頑迷なユダヤ人はこう考えました。万物の造り主である神に選ばれた唯一の民族こそユダヤ民族であり、その時から、神の恵みをほぼ独占し続けた自分たちと、全く同じ神の恵みが後から全人類に同等にもたらされることはありえない。もし、その恵みが神の独り子なる者を介して世に与えられているというのなら、これは神の契約違反となるが、神が違反者ではない限り、神の独り子とその恵みなるものはどこにも存在しない、と。

その恵みの存在を肯定する者、否定する者、この両者の決裂は決定的なものとなり今日に至ります。不幸なこととして。

ただ、水と霊とによって新しく生まれた者が神の国に入れられ、独り子の名を信じる者に永遠の命が与えられるという約束を、取り消すことのできる人間はどこにもいないのです。